



平家物語巻第五

特別
A12
5098
4



八12
5098
4

平家物語卷第五

都逸

物怪

朝敵掬

文覚勸進帳

福原院宣

間
五節抄法

月見

間
大陽早馬

咸陽宮

文覚流

富士川合戦

奈良火火上

平家物語卷第五

都遷

治承五年六月之廿日入道相國年以
 執事とてより進みたり福原へ移遷し
 ありしとてついでしきりていふ言ふ
 たりて一日月とてくさるる日此邦乃
 刻中約事如之と却るる時若くは河
 中母后とて母の右にありて世に
 なるに候なり平家物語の事なり



帥の高友そち河内興いぬふ年くまきうり同
う此目まよと福永へ入く世計人入るる事池
の中由云相國の家前白皇右中如回平
此自家の貴しとて陰目かこあはれく福盛
親正三位志ふ人九条教乃志子右大将始
通に志えく水七計より昔より格福志
ら達乃凡人よわ階越くまきと世計より
志始くも承りて行程く法皇いむ年此
冬は法より機動に離文よら釋義くは後

ら世計事乃公前在矣将宗盛は是の爲
まけしゆ極く多御友と出く車く八
條鳥丸おたり美福門院乃志少へ入るる
志とら承いする舎乃父の志謀教かうり
福永人志事成く志り回而かうり極を
志に一つ志と三志は板屋と作く入るる
志後此志志ゆい原田乃志事種志くり
その志うり志事ゆれ福永此志志の志而
とそりうり志事ゆれ志事ゆり

聖徳太子の御宇に於ては皇極の
政を以て教を施すに於ては
佛の如く人の心を慰むるを
入るに因て佛の如く人の心を
すむるを安んずるに治するを
開白佛の如く人を導くを
刹一院中二の如く人を導くを
此の如く世の如く人を導くを
るるが如くすれん人か人か
と云ふ事あり

後漢の如くは佛の如く人を導くを
おもひて佛の如く人を導くを
下耳緒の如く人を導くを
と云ふ事ありす神代天の如く人を導くを
故に佛の如く人を導くを
王子の如く人を導くを
五世十二代の如く人を導くを
辛酉の如く人を導くを
皇太子の如く人を導くを

己未の年十月、小東河へくは、大和と
若狭、くろく豊、意、永、以、津、國、留、く、海
火、の、心、と、情、く、柏、系、れ、地、と、伐、拂、く、帝、邦
と、立、文、室、と、修、り、針、人、柏、系、の、文、大、若、狭
あり、地、の、心、と、情、く、伐、り、門、の、邦、と
地、國、地、人、和、く、率、廿、夜、と、條、り、軍、
度、く、の、心、と、情、く、針、武、く、皇、く、り、率、り、
く、皇、く、七、十、二、代、と、打、回、く、國、郡、く、小
邦、と、立、く、地、國、人、と、逸、く、れ、と、成、勢、天、皇

元年、小を、以、乃、國、逸、く、と、率、乃、邦、く、和
と、の、以、仲、名、天、皇、二、年、小、長、門、國、小、逸
て、豊、浦、乃、郡、く、邦、と、立、く、と、國、乃、情、
小、く、門、く、と、立、く、と、七、勢、り、く、后、神、宮、皇
后、女、帝、と、立、く、と、讓、と、移、と、也、針、元、新、屋
百、洲、乃、彙、契、丹、と、始、く、と、吳、國、の、軍、と
平、け、と、の、ひ、く、と、後、我、乃、執、前、國、と、立
此、邦、り、て、王、子、に、繼、生、有、其、れ、り、く、と、
そ、い、而、と、生、乃、文、と、立、く、と、也、乃、後、の、後、と

應神天皇五十九年より由耶志系より由耶志
八幡の御事あり仁徳天皇元年より新津
乃國難波より遷りて高津の宮より遷りて
履中天皇二年より大和國より遷りて十
布比羅の宮より遷りて天智天皇元年より河内
國に移りて紫垣の宮より文倉の宮に移りて
天智四年より大和國より遷りて
高麗の宮より遷りて雄略天皇廿一年より
大和國より遷りて泊瀬の宮より遷りて

継體天皇五年より山根の宮より遷りて
十二年より後山根の宮より遷りて
大和國より遷りて松隈の宮に移りて
舒人欽明敏達用明崇峻推古舒
明皇極十七代より大和國郡
小和野より遷りて大化元年より新津
國長柄の宮より遷りて豊後國宮
新津の宮より遷りて大和國より遷りて
思兼の宮より遷りて天智六年より

國に遷る大津よ文と作り新天皇天皇
元年中大和國に遷る皇都北南の文
任令相統文武二代の聖物と行日
國有尔乃文の中任令元始元清聖武
謙撥帝稱性光仁と七代と行日國
宗良此部中任令相武天皇此部
延暦三年十二月一日乃日宗良此部
乃里と立制く山機國長思よ遷る
十年に終る任令日と延暦十三年

正月に於日大御言有尔小黒丸冬後天皇
每紀若古依美と事く西南國昔野
那字每此村氏人を三ひり人あり
養一と云は此の神と人のみな昔新
右白虎前朱雀後玄武四神お應の
地也毛帝部と来り此星り後くし刑
乃郡中乃府加賀氏の大明神も告り
乃む日と十一月廿日長思此系りり
の平安極中遷る帝王廿二代星君三百

八十餘載の春秋を送りびくても所
尚昔より代りて門の都と地を地
遷りてより一たび我が勝地を
桓武天皇皇孫と稱し
長久承平と稱し
女人中作と云ふ
鉄の鎧甲と云ふ
てく東山の嶺よ西向
らまうる毛い未世
は昔より代りて門の都と地を地
遷りてより一たび我が勝地を
桓武天皇皇孫と稱し
長久承平と稱し
女人中作と云ふ
鉄の鎧甲と云ふ
てく東山の嶺よ西向
らまうる毛い未世

物と物ありて
ある者ありて天下
相武天皇皇孫
ゆい平安傳
る天皇此の時
地を遷りて
能國の人

百と名取言うるまていさ事あり
といききれ雲乃あまやうてなん
嘆いけり初めの勢成りり格々

用うくくうる未そあ包うき
ち舟福余といゆとある日新那の事始
みへしと上島ゆい極大なるた大将
定丸後ゆい土御門の宰相の中將直親
舟の舟まはれ人前のおあ舟舟隆野
右中舟老政官人舟とお具して島國和

ま
具和舟乃西野と持て九戦の地代
まろり舟舟終る一糸り始る糸
まていあうる舟舟れりまていあうり
舟舟官物舟舟は中成りる事いす
播平舟舟平舟舟野う舟舟島國小舟野
舟舟とい舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

任人之地を失く愁し悔りたり人たる
去本のたむしと歎くありたり只いふれ
何れか事あり中めと去清に若事お
中將通親のりらり多うい異國よ三系
乃唐海を開く十二の洞門を立と云り
先我のゆ大系もてありん都ゆたしと
内裏と主たり人きとそらり多う先
烏し里内裏と他り多うとて五系り
大内云國邊の中内流り國と行りて謹進

せり多う中入る相國計りりりい國邊
とてい并るき大福長志とては姓多うい
里内裏道進せり多う事ありちありす
とていりり先指當り新う人とい様大
事會と指垂りてかお世れ親の中
中邊都道内裏少とお意せす古へり買
りりりり伐とい内裏とい芽垂りて膏
形とてりり不意相煙ありかききといは
てい浪りりり相相とて報重りりり老仰め

園と助け民と仁じ中後又彼唐に今家の
驩山宮と造りまじりていふに松生恒上
若しとまて無餘事よりいふおまじりる
將死臺とて七黎民ありけ秦の唐の
殿と造りて下下執りてと云つり
衣服又よりより世よりより物成
くとも人よりあり

月見

日と共々里内裏に幸始より八月十日
乃日と棟上田といふ七月七日の日は
そゆかし舊の事いふ意約いふと此部
昌す法よりよりよりより秋よりより
物よりより福ありとありと若し月日
人といふ或いふ氏乃大将の首に
はははたりめり人甫つて志願
方よりより信若難波はよりより
めり人福よりより人よりより回部

之休ん唐海の月とん中か、福永か
い存るの極極天吉れた夫将軍室の回部
月と悉針く入るお國か暇をひく八月十日
竹りぬちと部へゆとまきりうるをとう
若前くう月とんう獲る松永入系松
生田良湯野の月とんう雪井かあうす
布のうこまやいりあはくと若前
之持持のかりや悉少人あくと失く三人
の男は墓とくや任のこあは明かのか

若立海の難波本男との月新いる清水と
向くくん六田のあまは虫の毒か稲葉
かせくく内り着秋のこの証書は又ん公
くく便中うり大將回部かゆり入る
んをのあといまのう夏夜夜川桂川か
懐入後一銀うく人資賦難具あはは
て福永入運ひ下されゆり多か適く
枝のあくく六門前草ゆく底と霧を
草しり礼浅らう原多れうくく意んそ

茶蘭

只黄菊よりしれ人とも救ふるしと
都のあはれとてい妹を清くあま
れは前斗や上將人前を新く治人を
もつる熱門と批てふまに内より中
を止しあまやばうさうの霧打掃人
や掃下るあめとさうびまもい福原
しり上將人前を新く治人を
く熱門と鑿子鑿内をまてく作を東門
しりあを新く治人をまてく作を東門

とて東門よりそあまさうる作を東門
月あそとそもてあま其あまの熱門
とられあまあまやうゆとそいさし
源氏の治の巻の優安塞の文は口娘
秋の若女と情をけい理と志くあま
すううんあまもあまの左の月あ
此端よりあまの代打教とや思はれあ
撥して板を新く治人をまてく作を東門
うまはあまの撥とて治人をまてく作を東門

けまのきつと笑てそ失ゆらり又あり
日まんとてありて入る中門に軒人金を
くしとさきしとせむはひり志とさり
りらり中入る所とて人坪の肉と見たり
まのまやまきとら敷カうゆ六百子斗
みらくこととて下へ下へ下へ下へ
と人あり端より中へ入り中へ入り
と人おとれひあひらうひれとてうめき
あふ又ありとすまといとら中敷くことと

十丈斗少を講あうり時をあり又らんと
中がりの時をありと子方眼ともつる入る
友と腹とまより入るはらう醜とて人
とてあやまきとららとてとて子程の世も
小童人の目らへあんとて下りやうと腹
まはれありとてまとい露露のり日中あり
て消ゆらうとてくゆめとてとてあふを失わ
らう其の比又東國相摸國の役人出場の
之高系親う八ヶ國一乃馬とて平家系

らせありきりり額のか白くりきりり
皇月と若付て一月の辰よまをせ舎
人あまきく付そ人序何とるるすたを
うせくまきりり馬れ馬よ鼠と成らひ一
我のうらよる成生あけりこそゆきま
入る極る七人若博ちとあむらひを
らまきりりめ天下の駿とらひりやを
は馬とよあ倍の泰親行り昔天智天
皇此家のは馬の尾よ鼠巢と食一板の

ゆかち成生りりて下ととやうたうす
そ日平祀めいさりりまきりり入るの株
小十で又六次奉人とと髪とかふらめ切
ゆり希き直意とととと童とと若付と
三百余人白毛をさうり天物更て極ひ
うりこそ不思議あし又入るお圃れあ
ちありり時嚴つれ大ゆ神りり契
あきく覚えりり新りりまきりり白柄り
小長刀帯れ柄ととととととととと

其比俄か失くさるるを不思議あり
又其の移るるを邦より存する津中他
云雅相れへの許よりまきまきるる青竹の
入るる管もそ不思致され縦い神紙宿
此色と通るると思へりるるる来
帯りせ竹より上鷹のいらる毛並看と
新く伝美たんとれ松女よ此のひらるる
何よりやんと申かきゆ所上ゆ所左
上鷹の中より来るるを家より七心程

手家此形くくうつら部よりせし流人
共清佐相おみ新く人しと作ありるるゆ
又未存くゆ所より上鷹の手家此ゆ念
ゆりて思へると進立ゆゆと云なるとん
てむと人ゆ猪力かゆ福原とゆもま
ゆりて入る雅相れれ許へ使志代立ち
せむとるる人の男れゆりゆりゆりの換
とわぬるる層と実いまきしゆりまき
は男絶る直電とてんゆり入るる実い

いさぎよくりまはれ雅打の叶りしとや思ふれん
あつと福もあはれ下今人とのあはれ中成流
かすまはれ入る月力好す中やてさる野の
いさぎよの存ある宰お入る成積は中と傳
あつとくといし平家此軍又平いよとまは
あつとくい座とて中内座をさうり上臈の心種
平家此形りさうけつさ部をさ部信人
無事依頼のあつとくしと作あつとく
乗い八幡大菩薩しとて流をせつとん

上末座しと座さうり上臈乃平家此の人三より
し思ふとといまはれいしと人けりい嚴清の
大の神しとて流をせつとん此れ嚴清の安
錫経教に此亦三乃雅文女神しとてあつと
かすまはれ俗神しとて人さうりさる不思
後あはれ彼の神とて六通ゆさるあつと
と女神あはれ又あつと何の俗神あはれいしと
あつとあはれしとてさるさうりいさぎよ
いさぎよと嚴清のあつと入るさうり
いさぎよと嚴清のあつと入るさうり

懐い歎きふゆきて悲しかりしきしり
入る也新到しりしりふく一向海軍相模は
とあれおの地事なるも人夫たまは付り
志しむかりかふれは横の事とて実しり
平家世とあはく廿一年樂とて人々昔
ししとあはくとてあはく事た也
古舟作りか板造り見よと産しり
今言都とてと也とてあはく事と
と也とて事た也

大場軍馬

ゆと九月二十日東園相模は必り任人大
を乃と高島親軍馬とて平家(戸
多ると伊豆園の流人前右平家の横は依
頼物胃小条乃高島時政とて率し
都合をゆかり千余騎と八月十七日此
園の目代和泉判友益隆と八牧う殿
て長村ゆとあはく日相模園は打
越去肥去屋思後たあはく二百五
千余騎と

川幸とくく 由國乃内石橋の陣に折勢あり
てふと 宗親 義房 相模 二ヶ國の兵三千
金勢と川幸とくく 回舟して 北河を刻り
押考く 考し 中責し 程み 普清 佐軍に
打まじけ 直後七八段中討まじし 土肥 志
根とく 近勢りりいぬ 回舟す 中三浦の
又介う 一黨 五百金勢しと 源氏 中す 畠
山 五百金勢しと 味事と 江由井 小作に
て 合戦と 畠山 軍に 打負 義房 國り

川退と 江平 島西 品川 義房 中三浦 金勢
と川幸とくく 回舟して 中三浦 為 義房
此陣に 押考く 考し 中責し 程み 普清 佐軍に
またぬ 子 義房 中三浦 金勢しと 源氏 中す 畠
山 浦の 中三浦 義房 中三浦 金勢しと 源氏 中す 畠
と 義房 中三浦 義房 中三浦 金勢しと 源氏 中す 畠
毎りし

羽敵揃

千石 義房 中三浦 義房 中三浦 金勢しと 源氏 中す 畠

若き其郡より名をうけしと云ふ事一いつれ去
知あり是子長く身うしつて力人
小拂りり人氏多く寄りて其軍
数向一宣らると後しけ葛れ細とじり
て終一先と覆殺す志ありし事
野心と押志をいふ事子大なる此山丸大友
乃真多の舟屋れ大長曾我入麻山田河
又此宮田大屋乃大長乃大長此山丸大友
嗣大友長屋大長乃大長成惠大長押

勝しつて此皇后依良れを子橋の迷成有原
此伴成平乃將門有原乃純友安倍れ自任
室任對馬有原の義親悪た有馬清光
此山丸の事其別女官人ち先是ら何
廉素懐とてけあり 嚴と親つる事あり
云は惟順と獄つめありまあり

咸陽宮

遠く是物乃先服と防よ昔燕城子
丹と始白事者中因く禁公事あり

病りしは昔年老れまじい土馬少く者好
まといふ身はあしく感うり幸と思はる
松一の樹を伴ふは昔の年老くのみ
叶ふまゝ別の共と殆くのあまらんと
おろまゝに荊蒺散う神といふ人々宮貫心
幸下下中懐くあふらうといひまは
先生立由物より毛人々疑わらぬ色
うろ取いあゝい幸我不福た下下小
懐あい先生室く疑まきんとすい人の

はりの懐あい先生かふ安は思ふ人々と荊蒺
前して自害してこそ笑はる家か入禁於
期と云ふ無あり秦は困り志如うう親
伯父兄弟と姑白皇考か七と無の困り
逐勢ありと姑皇考か安と名と衆
禁於期う首并か無の指高物く系
丁の考ゆか五百竹の金と麻衣せん觸
らまきありと荊蒺散う存上は
我や世う首五百竹の金と麻衣せん

夫小室を也東西(九町)南北五町小作りま
みり大森乃下中五丈乃情針と立たれ
た打乃ぬれありわこか玉れ階あり深文
養良毛ととる程上腹してこやと字ん
膝乃言はらるる格ととる格下
危しとを父養良と謀叛乃人うとを
看の刑人よ進はらす刑人といふ是れ原
中並すととるいさもといふ荆河玄細父養
と全謀叛乃志あり燕乃國のいふととる

習くかか自皇看ととる大く大く問
或ととるいととる下若静りぬた
禁刑期と取并小燕乃乃面格ととる
差置乃入いあり格乃庭中の舞氷
かんとこの格ととる始皇帝ととる
悲ととる新ととる人志新ととる
衣の袂ととるも人志ととる
ととるあり既ととる人志ととる
上中いさ乃其乃神ととる

松戸人とすりの中力あり 只若蓬心かたりされ
新しん事と悲しと新しりと云つり始白帝
と云ふ人若后と相新しりて中若若陽
夫人とて勝まてり琴北と子口存より
始白帝荆斬し向く実いより我上
序付の帳と云ふ也よ最愛の后は琴の
若后と一交中かんと実人と荆斬殺
若の后と七夫人の屏風と隔てて琴と
若へ向存より凡は后の琴は若の

武まの操くはつぬを静るる若るは
若も若も麻く汁も況やふと浪の只
し汁の敷中ゆゆ人と烟人座を若れ
は若れい向白くも若り若め荆斬も謀
乃ん失くも若首と後耳を削る若と
若も若の若始く一曲と傳へ七夫人の屏風
と若も若の若躍い進め若る一重は若殺
と若も若の若い若り若れ若る若と烟
序を若る若と荆斬の若と若若十始皇

現當二世安樂之大利勸進狀夫以真
如廣大維立生佛假名法性隨去妄雲
厚覆後遙發慧十二因緣之奉心求
本有心蓮月光出未顯三毒四品之
空悲哉佛日遙沒生死流轉衢冥
冥耽色耽香誰謝狂象重潤之迷
謗入謗法豈免漏羅獄卒責負之憂
文光適擺俗塵唯飾法衣惡行打運
心日夜作善苗又逆耳朝苦之撥痛於

再皈三途火坑重迴生死苦輪以故重三顯
章于万軸軸之顯佛種因隨緣至誠
法皆以無不列菩提之彼岸故文光重
觀門落淚催上下真俗結緣勵上求蓮
其臺蹈建茅妙見玉靈場也其高雄山
山惟學榜翠峯山捐石辭鋪高山洞著
若泉咽門布嶺猿叫道教人里遠金真
塵師歸好有信心而已此形勝不可崇
佛心風聞聚沙為佛塔功德忽感佛心

况於一紙中致室賦年形成軌建立金剛
鳳曆清和未滿乃至都鄙遠近隣民編素
共致荒舞重為之化被椿葉再會咲
兼又聖灵出後前後大小共入二佛真門
基同翫三身万徳之月仍勉進修行
病蓋心如斯 治承三年三月廿日乃目
文覚法師敬白とて續とてり

又覚之流

杉山法住寺教中妙喜院の大政大臣

師長法住也推し 按察の大臣云實方
乃拍子と打く所俗僧馬来とていれ
より右馬頭實時和契とて細原中将心方
官位乃侍従師定とて拍とてりくわうあつと
玉の巻とてまいしくとてあかむ白より若き
と法皇とて威ありあきりゆり付方たんと
ゆむよりゆれまはしゆ又字がゆりあふと
中細子とてあつと拍とてりくわうあつと
まよふとていふとあまはれとて狼藉とて進符と

せりし作下程とありきまを
うみ事か合ふて思ふとあつた志
死傷くはくは神の聖に極の行言を後
目か事して云々は又完と
う維の神儀もゆとて國とて店か
てし一西教新いごうんおい又完全
兵中まうとそとらうり資の判友い完
う不煩はしんと考ううり西は又完
恨といたのよかあしりたゆ右の

肘と拵の資の判友う烏帽のとらして打
傷胸とてははげめばき多とす資の
判友と又完と烏帽の打傷とあ
とぬく大座のよんそ迎とらうり
又完の馬は多とて柄巻をみり刀は七寸計
あつらうり強あんとこの面うみんて
拵とてしりうかああはしん
待とあつたうりよめてい物進恨と
右とよめい彼刀とねく死らあうき

人自ら只ち舌をなまし刀と柄を握り
そをししは自ら教ふと勢のうとせし度
手や忘教と人を看るは其身をさし
まてといひしは教ふは不問は家上は徳圓
る後人安教と宗の道徳とて其をさし
ゆむるううと刀と柄と中絶をた聖と
切るは程ありしや思ひ人多く分れし程
て又宗の刀柄より其肘と肩へけり
そころより打るはわくのうしは其宗と

刀と投擲地をきききと紐を完いたるま
あしと宗の肘とをばはありしうと宗と
はうまあしとそと其ありしうと宗と
うと宗とばはうとそと其ありしうと宗と
下はなりしうと其ありしうと宗と
うと宗とつら考は我の若うふと地より木
と柄と柄と考は又宗と動く下はし
教しゆ柄とてんより又宗とてしちり
しと復せとてしちり又宗とてしちり

香より跡無に救えんとそ志きつり縦を
かどくそ志新いりく先勅進の聖とこれ
程と幸そめ成らんせ新むわまとい只と中
思ひあせりそんことり物成と界いんを
く是火宅也王宮とくく道りあうす
縦とくそ十膳の帝位よやうのあれ
黄泉の様よかじひそまん海の牛頭取
此若とい世あ由あう進あうくおと
躍とりりくせりうりそなほ又見えと

座此あ中あふ座り志七八人の中あひい
くくわうり座り志あい又見えと
くいあ出りし思ふそ人自中只座
此考あう又見えと門立くまうくわうと
そんあう種又見えと獄定せくふ
中あへ貸約判教い又見えと鳥帽子打
座をれく相目あやあひまん志りし
中あへせりり安有右宗と又見え縦
く動責あ一扇と鐘とて座座あ

右馬亮中そら成りて其比長福門院俄か
くまをせ針しとふと見えぬと歎と出
るれり又見えぬとわらぬとわらぬと
懐と指く十方檀那と勅めありと
う平家の人これあり通つと思つと
あつと生れ物思ふと平家の人これ
と世にわらぬと失くすとわらぬと
あつと平家の人これあり通つと思つと
あつと生れ物思ふと平家の人これ
と世にわらぬと失くすとわらぬと

右馬亮中そら成りて其比長福門院俄か
くまをせ針しとふと見えぬと歎と出
るれり又見えぬとわらぬとわらぬと
懐と指く十方檀那と勅めありと
う平家の人これあり通つと思つと
あつと生れ物思ふと平家の人これ
と世にわらぬと失くすとわらぬと
あつと平家の人これあり通つと思つと
あつと生れ物思ふと平家の人これ
と世にわらぬと失くすとわらぬと

て我々氣力少し衰へて座禪行法とてか
こゝろす伊豆の國めを思ふとさうり

福永院室

て程と又是とてい南國の左座を考へ
國を移るもそ那古座を思ふととそ
程とよりさうもそい常い考合兼田全音
と此事考と終合とまみ慰めあり
よりと河又又兼清依りさうり平氏

中ニ小杉友ニいりてその心と對ゆり
得る海を多毛とそ平家討
命と討てく本年八月廿九日
しと源平あまれ中と人ら小杉色知
將軍たおれり人かそぬそ早と
て日本乃將軍かたるとい田沼とやと
とさうまとい兼清依り考ぬ幸あり
去わら平治と又兼清と兼清と依り
小殊せうり人らと小池の禪屋と

らまゝ糸をけ 後の毎は華隆二部續
て一部は父母者養一部とい彼様位は
およかぬ御事なりしり印の地事あり
しそを穿ひしり又是をとりまけりい
天のちりりとありしはまの却るす抄を
結時とく初はしきとい都るを禱と
更と云ふ文あり又是がし色中ん
しりのまかたとい色といはりぬ
て布の袋中入ありしりと云ふ事なり

首と云ひ物と昔傳はあまといはりし
むしそは色は父を馬に取致るは須
か手治中獄下は色の中懼をこく
きり此痛りしと云ふ事ありしは
うもい時をも身と扱ふとす
す申まひせぬまとい今いし
うろ元新ぬらんとい又是は
い為よの志といはるる
作候とい思ふなり父の首と云ふ事

さかたの神かみに稽首かみく先漢せんと流りゅうるを
うらせれりきくそ謀叛ぼうはんといふなりく
思おもひ立たてり昔むかし依よ家けいいるるの勅ちく勅ちくの
被ひされ新あらたくせりてい率しつくを極たぎれよと
野の多おほく人ひととて室むろ人の父ちち元もと勅ちく勅ちくといひて
勅ちく一ひとましん昔むかし依よ家けいいるる流りゅう人ひとの身み
しるる人の勅ちく勅ちくといひて勅ちく人ひとと室むろ人ひと
こそ人ひとと小こ鉢はちといひて神かみと室むろ人ひとといふ元もと
まの我われ山やまの人ひとといひていひて人ひとの勅ちく勅ちくに

しと勅ちく一ひとましん小こ鉢はちといひていひて
毛けしり務む系けいに新あらたく勅ちく勅ちくといひて院いん宣せん何なにんか
一日いちにち上下じやうげ方かた八はちりあといひていひていひて
てそあといひて約やく好こう命めいといひていひていひて
たも昔むかし又また元もと勅ちく勅ちくといひていひていひて
て稽かみ首しゆといひて我われ伊い豆ぢゆれいといひていひて
の志しあり縦たて人ひと君きみなりたお捕とらへていひて
厚あつくすといひて父ちちといひていひていひて
かばつていひていひていひていひていひて

くろり小福糸の新部おれおろつき前右
普請の光緒の許お狎所録ありき
又光緒のこゆ落玉前右普請待光緒
子てく培りおろい伴臣回の流人普請待
相物とそ勅勅とておろい教され糸也
とて平家とておろい人とておろい人と結り
とておろい光緒の伴臣とておろい支所い糸也
平家お狎糸とておろい糸也月日光
とておろい糸也とておろい糸也光緒

くろり小福糸の新部おれおろつき前右
普請の光緒の許お狎所録ありき
又光緒のこゆ落玉前右普請待光緒
子てく培りおろい伴臣回の流人普請待
相物とそ勅勅とておろい教され糸也
とて平家とておろい人とておろい人と結り
とておろい光緒の伴臣とておろい支所い糸也
平家お狎糸とておろい糸也月日光
とておろい糸也とておろい糸也光緒

少存^{カク}るる^ル古^コく^ク成^ニり^シ成^ルる^ニ刻^キ斗^トめ^ル又^マ是^レ院^ニ
伊^イ皇^{ミコ}園^ノ小^コ落^ツと^シて^シく^クや^ヤ教^{カク}善^ニ法^ニ院^ニ
宣^ノら^レし^テ後^ノ世^ニと^シて^シ善^ニ法^ニ院^ニ新^ニ收^メひ^テ新^ニ
新^ニと^シて^シ淨^ニ衣^ニと^シて^シ名^ニを^シ米^ニと^シて^シい^ハふ^ルも^ト正^ニ
院^ニ宣^メし^テ用^メる^ル事^トも^トい^ハふ^ル也^ト云^フ

平^ヘ氏^ノ夢^ノ如^ク王^ノ化^シ金^ノ牌^ノ政^ニを^シ夫^レ我^レ朝^ノ者^ト
神^ノ國^也宗^ノ廟^相並^ニ神^ノ德^惟新^也故^ト
物^ヲ延^キ開^キ基^ニて^シ後^ノ教^子余^ノ歲^ノを^シる^ル今^ト
傾^キ帝^ノ猷^危國^家者^皆以^テ金^ノ不^ニ敗^ル小^ノ依^ト

之^レ上^ニ任^シ神^ノ道^を其^ノ助^ト上^ニ任^シ勅^ノ宣^メる^ル旨^ト
越^ニ早^ク平^ニ氏^ノ一^ノ類^退死^ノ心^歎繼^ニ續^ニ伐^メ
弓^ノ箭^を其^ノ略^ヲ可^ク立^テ身^ヲ真^ニ家^者院^ニ
宣^メ武^ノ仍^レ執^シ建^シ必^ニ件^ト治^平四^年七^月九^日
此^ノ目^前乃^チ大^ニ善^法持^テ先^ニ養^フ私^ニく^テ善^法持^テ家^ニ
へ^テそ^ノあ^らま^いは^しま^して^しら^ん

富士川合戦

其^ノ後^ノ院^宣と^シて^シ後^ノ世^ニ入^ルる^ル橋^ノ合^戦
我^ノ時^也其^ノ善^法持^テ其^ノ復^スる^ルけ^らま^しる^ル事^ト

あつと云ふは歌に我付事と云ふことと云ふ
ふありて人々をいふことと云ふことと云ふ
中山の副將軍薩摩の忠度の年未ぬ
てあそくもさうり高余れ中布ありたり
小神と一字送くまうりうり子室れ若後
と情もつ一首れ方とと歌つた者なり
東海若草集とと事人神りりて
そまぬたりとい行そ露もあそ
忠度の也事一やは

東海と云ふは歌に人越り
開と云ふは此ありか
開と云ふは此ありか
人此先征平將軍貞風相子の將門
進付ありあゆ東八の國へ赴きありし
そんともありか
情うそありし
將軍先年開と云ふ言ふと録りありし
今上養代有教と云ふ事ありし

為素列七殊代方常會と行つる兼
平天孝乃後致之年久く去つる人
くく掃川乃天皇此の時漢はる政威
未因情あるありし時對馬の海親遊
村乃おのりおもく下向ありし能く
と河に船十餘人入る報成り漢に
そら下よりを傳ゆ平家におまはれ
之く野原に露ゆ家伝より言根を
中様新くく止とまに河内海より

下の人程より殺すまに十月十六日
國津見り開少を差討人部とい三万余
後一七中ありし其の漢の兵より具
て飲食を賜ふ七万余後人津の軍川
蒲原よ支るし後津の未後此國平
越守津の軍より満くつとありし時
收上法ありしはく回し是病と行越八回
中討く合戦せよとありし東國の事

皆昔清和の治に於て入の二三十万騎
中者半は以り味も七万金騎といふ
其或は新兵或は旧兵此は長
槍と攻疲ていふゆへ叶はるし只赤坂と
山と前ゆあそ川と瀧と味も此は
約也新入なるもやゆんとりては
少將之力及び新入中少將劉將軍舊店
忠度と家人名々の守りなりは
物あり入るなりと一口と前くは討くを

とありし昔もまゝ人よと相場を自島
一黨とまゝなりとまゝなりとあり
是れ中々なりとありとありとあり
後少將東國の果肉志の自具をまゝあり
とありとありとありとありとあり
乃大矢村の志と東國のありとあり
世とありとありとありとありとあり
とありとありとありとありとあり
とありとありとありとありとあり
とありとありとありとありとあり
とありとありとありとありとあり

と昔より傳へたるに終つて用ひたる
とて勢行へしとてかたき情あり
申すは其時父と失くそ振寄り
同十八日小長津法親お十八日勝りて
足柄と越えし甲斐源氏南段武田小
笠原一万余ありて富士勝りし其
依り一ツの次信濃源氏大田平賀未曾
冠者も一万余ありて富士勝りし
とて其情依り一ツの次源氏行なく

其万余ありて同十八日源氏万余あり
富士川の端に押寄りし其情依り
源氏平賀川と勝りてそ支りし平賀其
は中より軍に今めり程とていふ
所よりいふ様の名ありと情あり
多しとて省しし其情依り
或は甲と名く情とて或は藤と名
て情しし其情依り
長井の城ありて其情依り

魚の作と周章とつらおれは繫馬よ京身
多事いふてしとくは只極とれこそ廻り
より狂い因事より志れは送馬よ京身
アラスまといまの西とんくく馬の東
此中人死すありこそ色とて静くあり
極秀極女たらしむ人ありくくわ
不騒動ゆ或い影希破くま或い鷹踏
極ま魚とて叫ぶる狂わくくあり事
其也のくせらる此印く刻め源氏女方

全書

雷川志端ゆ行和周と暖と作りあり
多事手家ゆゆの静りくくして事とせす
人と考して是も多事手家ゆゆとす
とり或い程とて人或い軍兵とて人
或い大幕とて人或い中物とて人
其法依王様のゆとく拜金くそむ極
く威勢ゆゆのあり八情大業のゆゆ
とてそ海とて針とてんやとて續てて事
多事破ゆゆ此全書東へとてせれり後念

へこそゆきまをれしききとて宿をたれは
中人をて昔より見迎と云ふ事いあま
中迎と云ふ事い未の戦場へひる上
軍は夫一つをさふて跡とてすて迎上
は初来とてくねりしすはうとそり
多の中やと上宿の古忠清の笛吹川
澄とみりききと忠清の志とみり
笛吹川は澄とみりききと忠清の志とみり
衣うきよは後のたれすし人

笛吹川の思ふす勝のさうら
くやとて清の伊勢をのりし
あまよいみけの馬あをたててさ
かひとまりしあけてうもあ
初老大将と宗國とよりしては
控急とてみり平家とてのさか後
ひるをたつ宗國のさか駿
樹とみりしとてけとさか
そね入たね園いしとてさかあいて人

水脈をまきくせんころ雨如物の鬼界
海へあふするをく上徳の由服と切
せんといへるまきくせんころ雨如物の鬼界
とれまきく入るちるあひあひすす
福永ゆい重大裏まきく志す修り
ししきく回工月七日此日忌遠事
しそ実ししす大天部い山と山
そまきくまきくまきくまきくまきく
下まきり書い波のまきく極内御しく

まきく噴くくまきく内裏へ山の中まきく彼
木の丸丸まきくまきくまきくまきくまきく
雨もあふるくまきくまきくまきくまきく
く麻の衣いり多福十帝其まきくまきく

回五言の由由

く年い大葺會可有とて天下皆
く葺あり大葺會とく十月の末
至上東河系へ葺まきくまきくまきく
肉乃小北野ゆま葺まきくまきくまきく

神供と烟人新尾乃此禮上中廻教と立
て古湯とありす回と煙乃ありむゆ大政宮
と作と神饌をゆ人震寢ありし程
あり清暑堂乃此神樂ありす舟橋
中の大極教とありすもこの大孔新ありし
くくも大く新尾堂とありし宴會
とさうすもこの清暑堂とありし清
神樂と奏せすはもと大しと年い五
新葺會れ政ありしとて行新部

乃政と旧神此神祇友と七善とまこと五
首と毛澤と系乃天皇と友乃王子ゆ
思と七新く大和國吉野乃家子恒と
淡乃町と此月白くもえ尚劍と
東乃門乃此とともとむとひく起とま
一神と小神女と忽と天下とてし女子と女
閑ととととととととととととととととと
度もととととととととととととととととと
ととととととととととととととととととと

夫は後、大に小致ると思召まゝうう人
山門若くは家底を新帳と指しなると
致るに、しきり守るべき家も新帳か入
る道理も極し、至田つまゝうん田
十二月十日日部ゆりまゝ人しとを
なす、行程もまゝ上郡へ還幸たたり平
家此人をうくゆり上りゆりうう人い
まして他家のうん、此種かくんうかり
し、福永の新郡か一日も徘徊をま

北す、七我定めとそらまゝう人、此處
といふあり、五聖殿川、桂門、壊入、終
紐う人、資賦、雜具と、亦し積る福永
へ、運下、由り、名立、まゝあり、まゝ
と、何れ、此の所、い、や、なす、まゝ、打、拵、て、を
ゆ、上、まゝ、り、か、つ、まゝ、し、ま、院、と、大、法、院
へ、新、年、あ、り、お、め、く、梅、さ、り、ま、ま、は
或、ハ、備、前、公、女、主、自、或、ハ、西、山、東、山
乃、片、倉、り、ゆ、ゆ、り、と、或、ハ、山、堂、に、廻、廊

或の社此宝前中河は持る人き人い人
立宿りてそ古府あり

奈良良尖上

しなはれ邦逸乃布之志をいひあてり
中回邦い山い南邦をくしん強
事迄あまの或い喜日此邦未と指け
きく上流し或い日若の神照いと昇
指きくない下流すふ回初永い
遙く福ありをいれををいれ

此事をくし輒く志く入心せむ
和をいれくしをいれししん知る舎れ
文のし律教し信く南邦此昔情未不
止む時移政ありり信後と信く信
しんあ旨ありあまの美事ナし及し作
くまはは去而をく取只平家四政此
入心しをく死しんをいれしん
そ協南邦しは師原し作く大
そ女越杖の玉氏作しそ先しをいれ

入る首と若分くうて踏まんと
しうり又ち七八丁の人形と作せ殺
され大卒部將中釘付し志て是
大政乃入るるとしり針小あつらん
しとしりうりい人形と拍案天皇
しとしりうりい人形と拍案天皇
大政乃入るるとしり針小あつらん
あはれ大卒部將中釘付し志て是
大政乃入るるとしり針小あつらん
あはれ大卒部將中釘付し志て是
大政乃入るるとしり針小あつらん

事此不慎い破とある基たう
しきかつと事まきい内裏
親心中作く動致舞りして
まとい大言本津川乃端中
い使と教ては法礫し刺勅
久二人う警りさうりつ使
しうりやきしと旬りもま
こし中父と失く近とり入
ち高き康と大和園乃檢
神せ

て南郡靜らうとして下さしうらう然世亦ら
矢打地腰の刀とて常とて人々うすしと室の
善康形く五百金路とて逆うらう勝
此刀とて常とて皆白装束あり物を
大前又本津川の端に行白益康う平
皆五百金路形く小銃形く割兵六千
余人の換とてうらう多様津の沈の端あり
うけとてうらう平家う粘る半廿とあり
ふらうとて思う人未はくい南郡とて最

向せとてとて上將軍由入に北田男義人
乃取主權仍上將也の勢中此決り無清盛
嗣上法乃立ら無清忠孝悪七無清系
清海形く盛賢とて人々とて南合其
勢五百金路治承四年十二月廿八日
よ南郡へとて最向せとてまきとて南郡
ゆとて大前良板殺みちる二つれをとて
塞とてとてとて矢うとてとて約け
舟の宿軍一室方金路皆武志たりう

指浩川浩毅いそはら中村なかつら大前おほまへの七しち子こ余あま人ひと并なら
おしりまありさるまの一日いちにち戦いくさ々々々々
兵へい入いるまの宗良むねよし飯いひ殺ころす二ふたヶ所ところ志し
保博たけひろ破やぶるまゆり取とるまゆりゆり惜おぼ
大前おほまへの宗良むねよし飯いひ七しち付つ死しす殺ころすまゆり
て自害じがいす行歩ぎんぷ之の叶はぬ老儒らうじゆあり
るまゆり宗良むねよし飯いひ破やぶる中なかゆ飯いひは高たか
信永のぶなが之の打物うちもの々々々々七しち大おほちち十五じふご大おほち

少すく勝かちまあり青苗あおなえの腹巻はらまきは黒系くろけい威いの
鏡かがみと名な目め早はや白しろ甲かぶつゆ五ご牧まき軍ぐんと回まわす
らりまゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
れ執しやくと迦あや摩まゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
我われの者もの々々ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ちちゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
じちゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
是こゝありまゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
十二月じふにがつ廿ふた八はち日にち此こゝの事こと々々々々々々々々々々々々々々々々

敵の事も之を以てして千上將軍病入念
死を願はば死するの多き者此れ前より打撃
火と申せし所と下知せし事毎りにき
て家上情慮固より後人福井の元
下司決り実友なりし指と破
て鐘書し志は蓋れ南次西に去るゆ
火と申せし毎りにけりといつた
多快吹速く風は黒煙天中み
て多く此伽藍は揮りけりあり仏像經卷

は文聖を以て於一卷を以てす回祿既り
地として小咸湯一朔の煙とあす為
たる児女房や各備男女の嫌あり或
山神寺東大寺へ我こそきかきそ迹跡
あり大仏殿の二階より老翁二千
取上敵をととせしと極る橋といひ
よりそり舟とこそと吹はく用
極火を由りしと押りけり
由り大由り大由り大由り大由り大由り

此談乃座の罪人其の悲しき是れ
とを又とて其の福もいそは淡海云は
在氏累代の寺也車金堂上座座
法初乃杖曲の像西金堂上座座
自然涌中此就世善瑞瑞と不へ
日向乃座朱丹とまりと二階乃
櫓九輪とく輝あり二基此塔と息
小塔とありそ此の東あり是常
左不滅実法非光乃坐力此坐業とれ

思ふあそへて聖皇自皇帝まつ
く鑄銘しあり也竹乃金銅十交
乃盛透那佛寫悲とく頻く杖天
新ゆくま色白直毛あり各中磨う
世竹人満月の杖とあり其の
大地とあり乃佛合と座れと八
万字下此相の杖乃月とあり其の
よ遠阿十一地の環路とあり其の
く十画の風とあり其の

杖の中天小

満て糧火と虚空と活とあそはゆ
ああり人々の志の交は眼とあてす
中侍人等人の肝魂と失つり天竺
且と志す十日布我物ゆと
法城の末の勢杖で王諸神八部
宿真流と定く勢と撃あんと
常て予より志すは相擁護乃妻
此神と名を事とる思召も人
あや春日野の露と交替り三笠
山に嵐

乃志まてし恨るるふそあそ
中侍人等人の志すは相擁護
上り志すしと交無備と
海一鉄門より掛を
うたもなむ邦とらるる美
思召も人等人の志すは相
そ務るまうりしと交戦場
大高敷と知すす或い
人あつり志すしと交戦場

三百余人大仙教の二階少一、千七百集
人しうや已上四千餘人しん中まると
後有終七しん平家ゆりや憤り晴く上
思ひまう一人一院新院移政方り秋き
ト斗まありりり縦画信方とことし
と云々他益とよ破滅と人まや
秋とありりりり事と聖我皇帝ゆ
展筆下りり起強文あり我寺自福せい
天下は必自福と人我寺表福せい

天下は必表福と人しんとことあそい
今人下し今し程成ありと下
此滅法疑ありし行し年益く治承
也五年ゆ成とあり

平家物語卷第五

慶長八年十一月八日

御幸挨拶書

